

## [実践報告]

# 少人数学級の中でリアクションフレーズを用いて 相手意識をもたせるための小学校外国語活動の授業デザインと実践

松永千茄\*<sup>1</sup>・呉屋博\*<sup>1</sup>・篠崎信彦\*<sup>1</sup>・倉田伸\*<sup>2</sup>  
長崎大学大学院教育学研究科\*<sup>1</sup>・長崎大学教育学部\*<sup>2</sup>

本研究の目的は、少人数学級における相手意識を育むための小学校外国語活動の授業デザインの提案である。そのために、相手の話に対して理解を示したり、うまく相手の話を引き出そうとしたりする活動を支援するリアクションフレーズを作成し、それを用いた授業をデザインした。さらに、デザインした授業を公立小学校の少人数学級で実践し、児童の相手意識に焦点を当てて、授業内容を検討した。その結果、場面・状況が設定された言語活動の中で、相手への感謝や反応に関する児童のコミュニケーション場面が見られた。その一方、児童のコミュニケーション場面で、尋ね返すやりとりが少し見られたものの、パターンラクティスにならないように、今後の改善が必要であることがわかった。

キーワード：小学校外国語活動 少人数学級 相手意識 コミュニケーション活動 リアクションフレーズ

## 1. 背景と目的

グローバル化が急速に進展する現在の国際社会で生きる子供たちにとって、外国語によるコミュニケーション能力の育成は生涯にわたり大きな課題である。平成29年3月に、小学校学習指導要領が改訂され、中学年の外国語活動及び高学年の外国語が導入された。今回改訂された学習指導要領では、育成を目指す資質・能力を「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱として整理している。語彙や文法、表現などの知識をどれだけ身に付けさせるのかを最終的な目的にせず、知識や技能が、実際のコミュニケーションの中で、思考・判断・表現を伴う活動を繰り返すことで習得され、学習内容の理解が深まり、学びに向かう主体的な態度が育成されるなど、外国語の学習を通して資質・能力が相互に関係し合いながら育成されることが強く求められている。「知識・技能」や「思考力・判断力・表現力等」をどのような方向性で働かせていくかを決定づけるのが「学びに向かう力・人間性等」の涵養である。この資質・能力は、人と外国語を使って主体的・積極的にコミュニケーションを図ろうとする素地を養うためには不可欠な要素である。(文部科学省 2017)

小学校では、初めて外国語と出会う中学年段階から、「相手意識」をもったコミュニケーションを繰り返し経験させることで主体的にコミュニケーションを図ることが重要な観点として挙げられる(菅 2017)。その際に、相手の立場に配慮しながら話を進めていくことで、「相手意識」をもつことができるのではないかと考える。菅(2017)は、この「相

手に配慮する」ということは、「相手の気持ちや思い、状況等を尊重する」と言い換えている。コミュニケーションは人との関わりの中で行われるものであり、そのときには相手の立場に配慮しながら話を進めていく必要があるとしている。また、金森（2004）は、『自分の発話に友達が耳を傾け、自分が受け止められていると感じる時、子どもたちはコミュニケーションの意義に気づくかもしれません。友達の話に耳を傾ける姿を褒めたり、友達との関わりを通して自分の存在意義を感じたり、関わることの楽しさを知ったりできれば、教室が安心して学べる場所になるはずです。』と述べており、また、スキル（英語力の器）の両側を支える「動機」と「関わり」が重要であると述べている。さらに、この両方がしっかり支えとして存在しないと、スキル（英語力の器）は不安定になり倒れてしまうとも述べている。参考として、外国語で育てたい「動機付け」と「人と関わる力」を図1に示す。

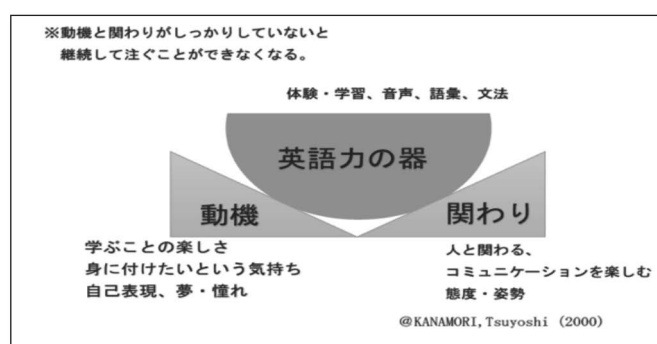


図1 外国語で育てたい「動機付け」と「人と関わる力」（金森 2004）を参考に作成

このようなことから、人と関わる中で、相手の気持ちや思い、状況等を尊重し、「相手に配慮する」コミュニケーションを繰り返し経験させることで、相手意識をもったコミュニケーション活動へとつながり、他者と良好な人間関係を構築しようとする態度を養うことができると思う。

一方で、日本では全国的に少子化が進んでおり、特に離島やへき地の多い長崎県には少人数学級や複式学級が増加している。学校教育法施行規則第4章第1節第41条では、「小学校の学級数は、12学級以上18学級以下を標準とする。ただし地域の実態その他により特別な事情のあるときは、この限りではない。」とある。また、1学級の児童生徒が10数名の学級を含めて、少人数学級の特性を生かした教育活動の充実を図る必要がある（全国へき地教育研究連盟 1985）。そのため、本研究では、1学級の児童生徒が10数名の学級を少人数学級と定義する。少人数学級のメリットとしては、児童の実態把握が容易できめ細かな対応や個別の指導が挙げられる。しかし、少人数学級のデメリットとしては、児童の人間関係が固定化され、言葉を交わさなくとも意思疎通が可能な状況が挙げられる。そのため、相手意識をもったコミュニケーション活動が設定しにくい傾向にあり、特別な配慮が必要である。当然、少人数学級であっても例外なく相手意識を育むことが大

切であり、そのための学びの開発が必要である。

そこで、本研究の目的を、少人数学級における相手意識を育むための小学校外国語活動の授業デザインの提案することとした。そのために、相手の話に対して理解を示す反応をしたり、うまく引き出そうと反応したりすることを支援するリアクションフレーズを作成し、それを用いた授業をデザインした。また、デザインした授業の実践を行い、少人数学級の児童の相手意識に焦点を当てて、授業内容を検討した。

## 2. リアクションフレーズ (Reaction Phrase)

本実践において、相手意識をもったコミュニケーション活動を行うために、リアクションフレーズ (Reaction Phrase: 以下, RP) を活用した。RP とは、相手へのリアクションを促す簡単な英語表現である。例えば、“I like soccer.” に対して、“Me too.” と同意を示したり、“Sorry, Once more please.” と聞き取れなかったことを再度尋ねたりする表現である。「話すこと」によるコミュニケーション活動を行う際に欠かせないことが、「対話を続けるための基本的な表現」を身につけることである。筆者は、児童の対話の中で、リアクションの仕方を形式的に反復し定着させることによって、相手に応じて自ら選択し、使うことができるようになって考えた。

また、小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック(文部科学省 2017)によると、小学校高学年では、「対話を続けるための基本的な表現」として、6点を指導することとしている。これらを参考に、RP を「あたたかい言葉 (Warm Interaction)」「お願い (Favor)」「反応 (Response)」の3つに分類し、児童がコミュニケーション活動の中で RP を使いやすくなるように精選・整理を行なった。「あたたかい言葉」とは、励ましたり、労いを伝えたりするリアクションである。「お願い」とは、尋ね返すことで再度の発話を促すリアクションである。「反応」とは、相手の話に共感したり、理解を示したりするリアクションである。「目的・場面・状況」が設定された言語活動において、児童たちが対話の中で相手の話した内容にふさわしい RP を選択し、使用することができるように工夫した。RP を精選・整理したものを表 1 に示す。

表 1 本実践で使用したリアクションフレーズ

あたたかい	Nice try! / Nice idea! / OK. / Wonderful. / Good luck! / Good job! / You can do it!
お願い	Slowly, please. / Once more please. Just moment, please. / More loudly. / Clear voice, please.
反応	Oh. / Really? / Of course. / Wow. / Me too. / That's right! / I see. / Uh-huh. / close! /

### 3. 授業デザイン

#### 3.1. 授業デザインの概要

本実践では、少人数学級において、RP を活用して相手意識をもったコミュニケーション活動を取り入れた授業をデザインした。児童たちがオリジナルネームステッカーを作成するために必要な情報をインタビューして尋ねる活動を取り入れた。そのために尋ねる表現や語句を知りたいという気持ちを児童が引き出すことができるよう工夫した。また、インタビューし合う際に積極的に RP を用いて、相手に反応を示すことによって、理解を示したり、話を続けようとしたりし、相手意識をもつことができるよう授業をデザインした。また、相手意識をもったコミュニケーション活動にするために次の2点を意識して授業デザインに取り組んだ。

1つ目は、相手と目的を意識した目標設定である。パタン・プラクティスにならないように、必然性のある活動を仕組んだ。児童たちが活動を誰と、何のためにコミュニケーションするのかという「目的」を明確にすることで相手意識をもつことができる活動を設定する。本実践では、ALT に教科書を配ってもらう際に、日本語で名前が書かれているため、配付できないという場面・状況を設定した。そこで、ALT が教科書を配ることができるように、教科書に貼るネームステッカーを作ることを児童の学習ゴールにした。

2つ目は、自ら知りたいと思ったことを尋ねるインタビュー活動の設定である。本実践では、オリジナルネームステッカーを作成し、交換会を行うことを単元の活動ゴールとしている。そのため、友達のために作る中で、友達の好きなものをステッカーに描きたいという児童の思いが出てくると予想させる活動を取り入れ、児童らがどのような言語材料を使い、どのように伝えるのかを明確にする。本実践では、ステッカーを作成するために知りたい情報を、児童たちが新出表現を使いながら尋ねることができるような「場面・状況」を設定することにした。本研究における単元計画を表2に示す。

表2 本研究における単元計画

時	1	2	3	4
活動内容	めあて：オリジナルネームステッカーを作るために色や形の言い方を知ろう。	めあて：好きなものを尋ねる表現を知って、友達にインタビューしよう。	めあて：友達に好きなものをインタビューして、オリジナルネームステッカーを作ろう。	めあて：オリジナルネームステッカー交換会をしよう。
	ねらい：RP に触れ、児童たちが実際の活用場面を想起させる機会を設ける。	ねらい：インタビュー活動を行う中で、話し手に RP を用いて反応を示すことができるように、実際に試す機会を設ける。	ねらい：スモールトークで RP を試す機会を設け、さらに RP を活用できる場を設ける。	ねらい：作成したネームステッカー交換会を行う中で、RP を積極的に使うことができるような活動を仕組む。

### 3.2. 少人数学級において相手意識をもたせるための工夫

少人数学級において相手意識をもったコミュニケーション活動にするために、次の2点を意識して授業デザインに取り組んだ。

1つ目は、何度も試す機会を仕組んだことである。本実践では、RPを何度も活用し、試す機会を設定した。そこで、次期学習指導要領の高学年新教材で設定されているスモールトークを取り入れた。ここでは即興的なやり取りを行う中で、RPを用いて相手の話に反応することで、お互いにもっと話したい、伝えたいと相手意識をもつことができることをねらいとした。スモールトークの中で、知っているようで知らないようなテーマについて即興的にやりとりすることで、友達の新たな一面を知るきっかけになると考えた。

2つ目は、相手への思いを形にする活動を取り入れたことである。相手意識をもつためには、授業デザインの工夫としてインタビュー活動を行い、得た情報を再度相手に返すことが大切であると考えたため、本実践ではオリジナルのネームステッカーを全員に作成することで相手への思いを形にすることにした。通常学級であれば、全員にネームステッカーを作成することは難しい。しかし、少人数学級であればオリジナルステッカーを全員に作成することは容易である。

### 3.3. 各授業のデザイン

第1時では、初めて児童たちがRPに触れる。ALTが各児童へ教科書を配ろうとしたが、英語で名前が書かれておらず、配ることが出来なかったという場面をあえて設定した。これにより、ALTが困っている様子を見ることが直面的になるため、ALTもわかるようなネームステッカーを作ろうという必然性のある学習課題を立てることができる。また、ネームステッカーを作る際に必要な情報を考え、相手の好きな色や形でネームステッカーを作りたいという相手と目的を意識した目標設定を目指す。第1時の授業の流れを表3に示す。

表3 第1時の授業の流れ

(分)	学習活動：第1時	
10	リアクションフレーズをどんな時に使えるのかを考える。	ここではRPの導入を行う。児童が実際にRPを活用できる場面を想定できることをねらいとする。
10	スモールトーク：「好きな色」についての英語トークを聞いてみよう。	ALTと授業者の会話からRPを探したり、どんな話をしているのかを考えたりし、聞くことをねらいとする。
15	オリジナルネームステッカーを作るために必要なことを考える。(色や形の言い方)	ステッカーを作るために必要な情報を児童が自ら考えることをねらいとする。
10	ゲームをしながら、音や形の言い方に慣れ親しむ。	音や形の言い方に慣れ親しむことができるようなアクティビティを行うことをねらいとする。

第2時では、はじめに児童たちがWhat color do you like?の表現を使って簡単なスモールトークを行なう。スモールトーク後は、ネームステッカーを作るために必要な情報を尋ねる表現が知りたいという目的を意識した目標設定を行う。好きなものを尋ねる表現に慣れ親しみ、実際にネームステッカーを作るための情報を集めるために、友達に好きな色や形のインタビューを行なう。その際に、RPを活用し、話し手に反応したり、わからなかったこ

とを、RP を用いて聞き返すなどの反応を示したりすることができるように、何度も試す場を仕組むことで、相手意識をもったコミュニケーション活動を目指す。第2時の授業の流れを表4に示す。

表4 第2時の授業の流れ

(分)	学習活動：第2時	
6	リアクションフレーズに慣れ親しもう。	RP の練習を行う。意味と発音を確認しながら練習することをねらいとする。
6	スモールトーク：「好きな色」について話してみよう。	児童同士で簡単な英語を用いて会話を行う。その際に RP をはじめて試すことをねらいとする。
10	オリジナルネームステッカーを作るために必要なことを考える。（「好きな色/形は何ですか？」の表現）	ステッカーを作るために必要な情報を児童が自ら考えることをねらいとする。
23	友達に好きな色や形についてインタビューしよう。（情報集め）	インタビュー活動を通して、情報を集めるとともに、RP を用いて反応することをねらいとする。

第3時では、はじめに、児童たちが What fruits do you like? という内容でスモールトークを行なう。スモールトーク後、どのような RP を使うことができたのか、使うことのできた RP に印を置き、RP を意識させることにする。そうすることで、次のインタビュー活動でも RP を意識することができることを目指す。その後は、ネームステッカーを作るために必要な情報を尋ねる表現が知りたいという目的を意識した目標設定を行う。2時間目に尋ねる色や形以外に聞いてみたいことを “What～do you like?” の表現を用いて聞くことができる活動を目指す。例えば、既習事項である食べ物や果物、スポーツなどを当てはめながら、好きなものを尋ねることを予想する。友達と好きなスポーツやフルーツなどの表現を使いながらインタビューしあい、実際にオリジナルのネームステッカーの作成を目指す。第3時の授業の流れを表5に示す。

表5 第3時の授業の流れ

(分)	学習活動：第3時	
3	リアクションフレーズに慣れ親しもう。	RP の練習を行う。ジェスチャーしながらリズムよく慣れ親しむことをねらいとする。
7	スモールトーク：「好きなフルーツ」について話してみよう。	児童同士で簡単な英語を用いて会話を行う。その際に RP をはじめて試すことをねらいとする。
5	オリジナルネームステッカーを作るために必要なことを考える。（スポーツ、動物、食べ物など）	ステッカーを作るために必要な情報を児童が自ら考えることをねらいとする。
30	友達に好きなものについてインタビューしよう。（情報集め）	インタビュー活動を通して、情報を集めるとともに、RP を用いて反応することをねらいとする。

第4時では、はじめに What～do you like? の表現の復習として、児童同士で好きなものについてのスモールトークを行なう。3時間目と同様に、使うことのできた RP に印を置き、RP を意識させることにする。そうすることで、次のネームステッカー交換をする際にも、RP を意識することができることを目指す。そして、オリジナルのネームステッカーの交換

会を行なう。はじめに、ペアで作成者がステッカーを見せ、紹介しながらプレゼントする活動を仕組む。次に4人と3人の2組のグループに分けて、受け手が Do you have～? の表現を使って作成者にステッカーの情報を聞き出していき、作成者は Yes./No. のみで答えて、正解するとネームステッカーがもらえるという交換会を行なう。相手への思いを今回はネームステッカーを作成することで形にすることで、相手意識をもって活動に取り組むことができることを目指す。第4時の授業の流れを表6に示す。

表6 第4時の授業の流れ

(分)	学習活動：第4時	
3	リアクションフレーズに慣れ親しもう。	RPの練習を行う。ジェスチャーしながらリズムよく慣れ親しむことをねらいとする。
7	スモールトーク：「好きなもの」について話してみよう。	児童同士で簡単な英語を用いて会話を行う。その際にRPをはじめて試すことをねらいとする。
10	オリジナルネームステッカー交換会のための準備をしよう。(新出単語や“What～do you like?”の表現)	この単元の復習を行うことをねらいとする。交換会に向けての意識を高めることをねらいとする。
20	オリジナルネームステッカー交換会をしよう。 (1) ペアで交換し合おう。 (2) Yes/No クイズで自分のステッカーを当てよう	この活動は単元のゴールであり、相手にRPを使って反応したり、感謝を伝えたりすることをねらいとする。
5	単元を通しての振り返り	音や形の言い方、好きなものを尋ねる表現の復習と、RPを活用することの良さを最後にまとめすることをねらいとする。

#### 4. 結果

##### 4.1. 第1時の実践状況

第1時で、児童ははじめてRPに触れている。児童の振り返りから、RPを使うことに難しさを感じていることが分かった。第1時では実際にRPを活用し、児童同士で会話を行う機会を設けておらず、RPの練習のみ行なった。そこから、ここでの難しさは、RPの言い方に関しての難しさであると考えた。また、児童がコミュニケーション活動を楽しかったと肯定的に捉えている記述も見られた。児童の振り返りを表7に示す。

ビデオの発話記録を分析した結果、児童はALTと授業者の対話の中でのRPを聞き取ったり、どういう場面でRPを活用するかを考えながら聞いたりしている様子が見られた。また、RPの練習の際には、RPの「お願い (Favor)」で分類されたRPの練習でつまづいていることが分かった。他のRPに比べて、少し長いRPは児童にとって使いにくいことが分かった。

以上のことから、第1時ではRPに慣れ親しみ、RPを用いることの良さや楽しさ、難しさを実感できていることが明らかになった。

表7 第1時の児童の振り返り

児童の振り返り (自由記述)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・おねがいの言葉が難しかったので、これからもたくさん使って覚えたいと思います。</li> <li>・楽しかったです。普段から使っている言葉がリアクションフレーズだと初めて知りました。</li> <li>・リアクションフレーズを使うことは難しかったです。</li> </ul>

#### 4.2. 第2時の実践状況

第2時では、RPを試す機会である。児童の振り返りから、RPを実際に使うことができたという実感を得ている記述が見られた。具体的にどのRPを使えたのかを取り上げていることから、何度もRPを使うことができていることが分かった。また、使えなかったけど反応しようと思ったという記述や、次はもっと使ってみたいという記述から、意欲的にコミュニケーション活動に取り組もうとしていることが分かった。児童の振り返りを表8に示す。

ビデオの発話記録によると、RPをどのような場面でどのように使えばいいのかがわからないままの児童も見られた。その児童は難しかったと振り返りに記述していることから、RPを用いてコミュニケーション活動を行うことに困難さを感じたのかもしれないが、児童のやりとりに着目すると、1回のコミュニケーション活動に対し平均して8回のやりとりが行われていた。困難さを感じながらも、自分が使うことのできるRPを選択し、活用していることがわかった。その児童のやりとりを図2に示す。また、ビデオ分析からRPで反応することで話し手が、伝わっていたことに安堵する表情が見られた。

以上のことから、第2時ではRPを初めてコミュニケーション活動の中で用いる中で、困難さに直面しながらも、使うことのできるRPを選択し、相手とのやりとりを続けようとする場面が見られた。また、話し手もRPを用いて反応されることによって、伝わったことを実感し、さらに話を続けようとしている様子が見られ、相手意識を話し手も聞き手ももつことができていたことが示唆された。

表8 第2時の児童の振り返り

児童の振り返り（自由記述）	
・	前回よりリアクションフレーズが使えました。
・	リアクションフレーズは、もう一回話して、やOK. や、わあ〜。などが使えました。
・	リアクションフレーズは難しくあまり使えなかったけど、反応しようと思った。
・	リアクションフレーズは難しかったので、次はもっと使ってみたいです。

図2 インタビュー活動でのある児童のやりとり

1	A: Hello. What color do you like?
2	B: Blue and Red.
3	A: One more please.
4	B: OK. Blue and Red.
5	A: OK. What shape do you like?
6	B: Umm... Star!
7	A: Oh, Me too. How many stars?
8	B: 4 stars!

#### 4.3. 第3時の実践状況

第3時では、RPを試す機会を設け、インタビュー活動を中心に行なった。児童の振り返りから、第2時よりもRPを用いてコミュニケーション活動を行うことに対して肯定的な考えをしている児童が増加した。また、振り返りからRPを使うことに慣れてきていることが



分かった。児童の振り返りを表9に示す。

ビデオの発話記録からも、第1時では難しいと述べていた「お願い (Favor)」のRPもコミュニケーション活動の中で用いている様子が見られた。具体的には、One more please. や Clear voice please. などの尋ね返す表現や、聞き取りにくい際に用いている場面が見られた。理解を示す反応だけではなく、聞き取れなかったことを聞き返したり、聞き取ったことを確認するために聞き返したりしていた。

以上のことから、第3時ではRPを使うこと慣れてきていることが分かった。また、RPで反応をされた児童に注目すると、工夫してより相手に伝わるような言い方に変えて答え返したり、ゆっくりと声のトーンを変えて答え、相手に伝わるような工夫をしている様子が見られたことから、相手意識をもっているやりとりを行なおうとしていることが明らかになった。

表9 第3時の児童の振り返り

児童の振り返り (自由記述)
<ul style="list-style-type: none"><li>・ Oh. や OK. などのリアクションフレーズ を使うことができました。</li><li>・ リアクションフレーズ を覚えてきたので、今度はたくさんつかってみたいです。</li><li>・ 今日はあまりリアクションフレーズ をとれなかったので今度は使いたいです。</li></ul>

#### 4.4. 第4時の実践状況

第4時では、作成したオリジナルのネームステッカー交換会を行なった。RPを活用するコミュニケーション活動を仕組むことが難しかった。最初に行なったスモールトークでは児童たちがRPを活用する場面が増加した。また、児童の振り返りから、実践後に具体的に反応をしてみたいという気持ちや具体的な活用場面の記述が見られた。「反応をされると嬉しかった」という記述から、コミュニケーション活動の中で喜びを実感している児童がいることが分かった。さらに、活用場面を想定し、RPを使うことで、実際の場面でも反応してみたいという気持ちになったのではないかと考えた。反応されることが嬉しいと思ったり、実際にRPを使って反応してみたいという記述から、理解を示したり、話し手の会話を続けようとしたり、相手に伝えようとする気持ちを高めたと考えた。児童の振り返りを表10に示す。

ビデオの発話記録から、普段からどうしても黒板や手元にある紙を見ながらコミュニケーション活動を行なっている印象があった児童たちが、RPを用いる際に、自然と身振り手振りをしながら伝えようとしたり、意識して相手を見ながら話そうとしたりしている様子がみられた。そこには相手に伝えようとする姿に変容があった。

以上のことから、第4時では、児童がRPを用いてコミュニケーションを図ることで肯定的な考えをもつことができたことが明らかになった。また、相手にRPを活用することで話し手にも変化があり、相手に伝わるように話そうとする様子が見られ、相手意識をもったのではないかと考えた。

表 10 第 4 時の児童の振り返り

児童の振り返り（自由記述）
<ul style="list-style-type: none"> <li>・反応や温かい言葉の中に聞いたことがある言葉が多かったです。これからも英語の時に使ってみたいです。</li> <li>・最初はリアクションフレーズを知らなくて、どう反応していいかわからなかったけど、今はどう反応していいかわかるようになりました。</li> <li>・使えると便利なので、外国の人に会ったら、使ってみたいと思います。</li> <li>・リアクションフレーズは最初すると難しくて言いにくかったけど、練習しているうちにだんだん使えるようになって、リアクションフレーズ を使って反応するのが楽しくなりました。</li> <li>・リアクションフレーズ で反応されると嬉しくなりました。</li> </ul>

## 5. まとめ

本研究では、少人数学級における相手意識を育むための小学校外国語活動の授業デザインを検討するために、リアクションフレーズを活用した授業をデザインし、実践を通して学習内容を検討した。その結果を以下に示す。

- RP を活用したコミュニケーション活動は相手の話に理解を示したり、話をうまく引き出したりするための手立てとなりうる。
- 言葉を交わさなくても意思疎通ができてしまう少人数学級において、「場面・状況」を授業中に設定することで、「伝えたい」「伝わっていることを反応で返したい」という気持ちが育まれ、相手意識を育む活動が可能である。

今後は、RP がパタン・プラクティスにならないような工夫が必要である。また、今回は一単元のみの実践であるため効果測定が難しかったが、今後は1年間を通して継続的に RP を取り入れることで日常生活でも変化する児童の反応を検討していきたい。

## 参考文献

- ・菅正隆（2017）「小学校教育課程実践講座 外国語活動・外国語」，ぎょうせい，pp. 15-16, pp136-138
  - ・金森強（2004）「英語力幻想」，アルク，pp. 248-252
  - ・兼重昇，直山木綿子（2008）「新学習指導要領の展開 外国語活動編」明治図書
  - ・岡秀夫，金森強（2012）「小学校外国語活動の進め方」成美堂
  - ・文部科学省（2017）小学校学習指導要領解説 外国語編，開隆堂
  - ・文部科学省（2017）外国語ワーキンググループにおけるこれまでの検討事項
  - ・全国へき地教育研究連（1985）「いつでもどこでも役立つへき地・複式教育ハンドブック」全国へき地教育研究連盟
  - ・文部科学省（2017）「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」
- [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/1387503.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1387503.htm)